

ハリミズゴケ *Sphagnum cuspidatum* Ehrh. ex Hoffm.

【選定理由】

本種は県内ではオオミズゴケと殆ど同じ分布域に生育し、園芸用として利用価値が高いオオミズゴケと同じ湿地で、棲み分けをしていることが多い。従ってオオミズゴケと一緒に乱獲される場合が多く、オオミズゴケと同じく保全に留意する必要がある。

【形態】

オオミズゴケとほぼ同じ大きさであるが、葉先が茎葉、枝葉共に細長く、先端も細長くとがるので、顕微鏡下で区別できる。枝の形も先端がより細く伸びるので、肉眼でも判別できる。ハリミズゴケの和名もこれらの特徴に基いている。

【分布の概要】

【県内の分布】

旧南設楽郡から北設楽郡にかけての山地に多い。名古屋周辺にも出現するが、その場合はヌマスゲやヤマドリゼンマイ等の生育する、いわゆる遺存寒地植物の繁茂する湿地に多い。

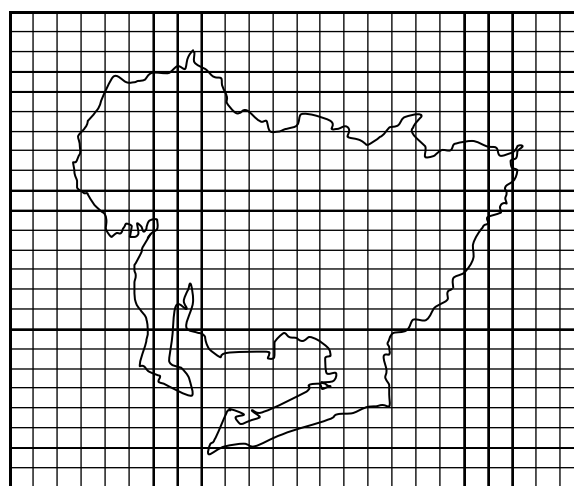
【国内の分布】

本州以北、北海道にも分布するがオオミズゴケより北方に多い。

【世界の分布】

北半球に広く分布する。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

上記のように、オオミズゴケと一緒に生育する機会が多いが、より寒地的色彩の強い維管束植物の生育する湿地に多い。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

園芸業者や園芸愛好家による乱獲もあるが、それ以上に土地開発による湿地の消滅によって、急速にその生育地が失われつつある。

【保全上の留意点】

園芸用として利用価値が高いオオミズゴケと一緒に生育しており、乱獲されることが多い。オオミズゴケ以上に遺存寒地植物と共存する機会が多いため、本種の生育する湿地は、単にオオミズゴケのみの湿地より、その保全に留意する必要がある。

【特記事項】

オオミズゴケに比べ生育地が少ないため、湿地の性格を意義付ける価値は一層高いものと思われる。

【関連文献】

高木典雄, 1961. 作手湿原のミズゴケ類. 虫譜, 8 (1): 47-48. 三河生物同好会.